2025年度

入学試験問題　（2期）

国　　語

2025年 2 月 4 日（火）

解答を始める前に次の注意事項を充分に読みなさい。

受験上の注意事項

1．受験票と筆記用具以外は机上に置いてはいけません。
2．試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
3．不正行為と認められた場合には退席を命じることがあります。
4．「開始」の合図で、問題冊子・解答用紙を点検し、解答用紙の受験番号・氏名欄に受験番号・氏名をはっきり書いてください。
5．問題に関する質問は不明瞭な文字等の確認以外は応じません。
6．問題冊子の余白部分や白紙のページは、自由に使用してかまいません。
7．試験終了時まで退席することはできません。試験終了の合図と同時に、監督者の指示にしたがって解答用紙を通路側に置いてください。
8．身体の具合が悪くなったときは、手を挙げて監督者に申し出てください。
9．携帯電話を持っている人は電源を切ってください。これを時計として使用することはできません。
10．問題冊子は持ち帰ってかまいません。

〔Ⅰ〕

次の文章Aと文章Bに関する設問に答えたのち、文章Aと文章Bを関連づけて考察する設問に答えなさい。（作問の都合上、一部表記を改めた所がある）

文章A

怒りっぽいのは「性格」のせいではなかった!?

朝のラッシュアワー。あなたは駅の人ごみのなかを歩いている。ホームに満員の電車がスペ[a]り込んでくる。前の人と間を空けずになんとか電車には乗ることができてホッとする。しかし後ろからはまだたくさんの人が押してくる。前後左右すべて知らない人と密着して、身動きもとれない。他者と密着するのは、想像以上に体温の熱さを感じる。首筋からは汗が流れ落ち、肌には衣服がはりついて、あなたはとても不快に感じている。

こんな状況のとき、誰でも少しイライラする。ストレスを感じない人などいないだろう。

なかには突然キレたり、怒り出す人もいる。トラブルに発展する場合もある。

もちろんその理由には、忙しくて心に余裕がないとか、たまたま嫌なことが続いていたなどといったケースもあるだろう。

そして多くの人が、ストレスは心で感じるものだと思うだろう。ここでいう「心」とは、感情や意欲といった情緒的な部分を指すものとしよう。

もしも、ストレスは心で感じているだけではない、といったら驚くだろうか。

ストレスは、皮膚でも感じている。考えてみれば当然のことなのだ。

冒頭の例のような、不特定多数の人との接触や温度、湿度の変化もそのひとつだ。

例えば硬くて冷たい椅子と、心地よく体にフィットする椅子。どちらに座ったときにストレスを感じるだろうか。

またサイズの合わない着心地の悪い洋服を身につけたときと、自分用に仕立てられた着心地のいい洋服を身につけたとき、どちらがよりストレスを感じるだろうか。

答えは明らかだ。

皮膚は、意識下で感情に影響を与えている。

「確かに硬い椅子に座るのは居心地が悪いが、感情に影響を与えているなんて、大げさではないか」という人もいるかもしれない。しかし、私たちが「触覚」として意識しているのは、実は氷山の一角であり、無意識下ではとてつもなくボウダイ[b]な情報量が脳に流れ込んでいるのである。

無意識下で不快感が増長すれば、自ずと感情に影響を与えるのは当然のことなのだ。さらにいえば、不快感などの感情は、心よりも先に「皮膚が感じて」いる。

「身の毛がよだつ」「肌で感じる」「鳥肌が立つ」という慣用句があるが、これも、心よりも先に皮膚が反応していることをよくあらわしているのではないだろうか。

例えば①**「鳥肌が立つ」**のは、現象として説明すれば、寒いときに立毛筋を**シュウシュク**させて体温の放出を防いだり、熱をつくるためである。このように皮膚は心とは関係なく反応する場合もあるが、恐怖や感動など心に先んじて反応する場合もある。

恐怖はもともと毛のある哺乳類の動物にとっては、敵に襲われたときに毛を逆立てて身を大きく見せるための反応であるが、人間にとってはほとんど意味がない。感動して鳥肌が立つ場合もほとんど意味を持たない。しかし逆に考えれば、鳥肌が立っている感覚があることで、自分が感動していることがわかることもある。そのようなときは皮膚が反応している原因を自己分析することで、自分が意識できない深層心理を理解することができる。

またこれを利用して、ある人が無表情を**装**っていても、鳥肌が立っていたとすれば、強く感情を揺り動かされているのがバレてしまうし、やたらと自分の顔や手などを触っていたとしたら、間違いなく緊張や不安を感じている証拠にもなる。

皮膚は嘘をつけないのだ。

ちょっとしたことでイライラしたり、常にストレスを感じていたりするのは、もしかするとあなたの性格ではなく、皮膚感覚のせいかもしれないのだ。

皮膚という「露出した脳」

ではなぜ、皮膚は心にも影響を与えるのだろうか。

例えば悲しみに暮れているときに、親しい人に背中をさすってもらうと悲しみが癒えるといったことはないだろうか。また疲れて帰宅し、ペットを膝の上に乗せて、そのふわふわの毛をなでているだけでホッとして、落ち着いてくることはよくあるだろう。

これは決して気のせいなどではない。

皮膚は、体の表面を広く覆っているが、ただの膜ではない。イギリス生まれの人類学者であるアシュレイ・モンターギュは、②**「皮膚は身体でもっとも大きな感覚器官である。皮膚を構成しているさまざまな要素は、脳と非常に似た機能を持っている」**と、

今から40年以上も前に述べている。

脳がなくても生きていける生物は山といるが、皮膚がなければどんな生物も生きてはいけない。

腸は「第二の脳」といわれるが、皮膚も「第二の脳」といわれたり、腸に次いで「第三の脳」といわれたり、「露出した脳」といわれることもある。

それは、皮膚と脳の発生の過程を見れば明らかだ。

人間の受精卵は細胞分裂を繰り返して人間らしい形になっていくが、このとき、細胞は外側から外胚葉、中胚葉、内胚葉という3つの層に分かれている時期がある。それが次第に分化して、例えば内胚葉からは内臓、中胚葉からは骨や筋肉などに分かれていくのだが、実は外胚葉からは、皮膚と脳に分かれていくのである。

つまり皮膚と脳は、もともとは同じものだったというわけである。だからこそ、脳に勝るとも劣らない【　A　】を備えているのだ。

【　B　】皮膚は、脳と比べて、その突出した面積の広さから、多くの感覚を感知して、大量の情報を処理している器官なのである。

③**皮膚の刺激は脳に直結している**のだ。

触覚や温度感覚、痛覚などの皮膚からの刺激は、e脊髄に入ったあとに比較的単純な経路で脳に到達し、認識や感情の中枢を刺激する。

だから、皮膚をなでることは、脳をなでるといってもよいほどだ。脳は直接なでることはできないが、皮膚をなでることならできる。

スキンシップと親子の関係については後述するが、例えば赤ちゃんの肌を母親が直接刺激するベビーマッサージなどがいい例だ。

母親が我が子の肌を直接刺激することで、子どもの脳に刺激を与え、ひいてはそれが脳を育むことにつながるのである。

（山口創著　『皮膚は「心」を持っていた！』　青春出版社）

〔設問〕 次の設問に答えなさい。

問1 波線部a～eで、「カタカナ」は漢字に、漢字は読みを「ひらがな」で答えなさい。

問2 傍線①**「鳥肌が立つ」**のはどのような時か。**適切でないもの**を次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 寒いときに立毛筋をシュウシュクさせて体温の放出を防いだり熱をつくるとき。

イ 緊張状態を心が客観的に認識して、認識した脳が皮膚に指令を出したとき。

ウ 恐怖や感動など、心に先んじて皮膚が反応するとき。

エ 敵に襲われたときに毛を逆立てて身体を大きく見せるとき。

問3 【 A 】に入る適語を次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 情報選択能力　イ 感覚選択能力　ウ 感覚処理能力　エ 情報処理能力

問4 【 B 】に入る適語を次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア しかも　イ しかし　ウ だから　エ その結果

問5 傍線②**皮膚を構成しているさまざまな要素は、脳と非常に似た機能を持っている**とある。その原因と考えられることは何か。本文中の言葉を使い、八十文字以内で答えなさい。

問6 傍線③**皮膚の刺激は脳に直結している**とあるが、それを別の表現で表すとどうなるか。次のア～エの中から適切な文を一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 皮膚は多くの感覚を感知して多くの情報を漸次脳に伝える。

イ 皮膚からの刺激は、順を追って時間をあまりかけずに脳に到達する。

ウ 皮膚をなでることは、脳をなでることといってもよい。

エ 皮膚は、脳と比べて、面積の広さから、多くの感覚を感知できる。

文章B

心身二元論

誰もが、自分が「心」を持っていることを知っており、他者も「心」を持っていることを確信している。そこで、ヒト以外の動物を見て、彼らの行動や表情を見ると、動物たちも「心」を持っているように感じる。「心」とはなんだろう？　私たちが、自分の内部で日々、考え、感じ、思い、欲している、それらの結果に関連して自分のからだを動かしている、そういうことをしている全体を「心」と呼んでいるのだろう。

「からだ」と「心」を分ける二元論は古くからあった。からだは実体であり、自分の目で見て、触って、動かしてみることができる。からだは確かに、ここにある。隣の人のからだも、ここにある。私の手と隣人の手が、同じような構造をして同じような働きをするものであることは、観察によって確かめることができる。しかし、「心」はどこにあるのだろう？　つかみ取ることもできないし、この眼で観察することもできない。隣人の心を取り出して、私の心と同じ構造と機能を持っているのか、手と同じように単純に比べてみることはできない。

科学的探究において、「からだ」と「心」を峻別（しゅんべつ）したのは、近代科学のソ[f]の一人である、ルネ・デカルトだった。④**デカルト**は、近代科学の自然観である機械論的自然観の**テイショウシャ**[g]である。【　C　】とは、自然界は巨大な機械のようなものであるととらえる自然観である。すべての機械には動く仕組みがあり、仕組みがわかれば対象が理解できる。同じように、自然現象も機械のようなものであり、それらが起きる仕組みがあり、それが理解できれば自然は理解できると考える。仕組みを理解するには、構造や機能を精密に調べていけばよいのであり、そこに、「心」やら「意図、意志」などを持ち込む必要はない。いや、持ち込むのは誤りである。これが機械論の骨子である。

なぜ機械論的自然観が出てきたかといえば、それ以前の⑤**有機的自然観**による自然の探求が混乱をはらんでいたからである。近代科学の成立以前は、古代、中世からルネサンスにかけての時代である。近代科学成立前夜では、自然界の探求は、錬金術や**オカルティズム**(注1)の中で行われており、自然界を巨大な有機体ととらえる見方が主流であった。生命が生まれて、育って、欲して、考えて、つまりは生きて、そして死ぬ、という一連のプロセスこそがすべての自然現象の成り立ちの根源であると考えていた。物体はその本来の所属するべきところが地上であり、そこに帰りたいと欲するから落下するのだとか、結晶は胎児が母体内で育つように地層の中で育つとか、生命に**付随**[h]すると思われる「心」や「意志」をさまざまな非生物的現象にも当てはめて解釈しようとしていた。

デカルトは、こんなことでは混迷しかもたらされないと考え、自然現象の説明から「心」や「意志」を取り除いた。物体が落下するのも、磁石が磁力で鉄をひきつけるのも、何か無機的、機械的な力があればよいので、そこに物体が持つ「欲求」という概念を持ち込む必要はない。彼は、ヒト以外の動物の存在と行動も、「心」を取り除いて機械的な仕組みだけで理解できると考えた。

【 D 】人間自身はどうだろう？　私たちが「心」を持っているのは自明だった。なにしろ、「我思う、ゆえに我あり」の洞察を持ったのが、デカルト自身なのだから。考えたすえに、彼はヒトの「からだ」と「心」を峻別（しゅんべつ）する心身二元論を提唱した。からだは単なる機械として理解できるが、「心」はからだの範疇（はんちゅう）には属さない。「心、魂」は、物質世界とは**ムエン**な、神が人間に与えたものである、という結論である。

これで、近代科学はメカニズムの解明というドライな使命に徹することになり、機械論的自然観は大いなる知識の発展を導くことになった。それにしても、「心」とは何なのだろう？　どこにあるのかもわからない。本当につかみどころがない。デカルト自身、このつかみどころのない「心」というものを、からだという実体のどこかに明瞭に位置づけたい気持ちがあったのだろう。脳の**松果体**(注2)の部分に目をつけ、ここが「心」の座ではないかなどと推測している。当時、松果体の機能はわかっていなかったので、デカルトは「心」の座の候補地として松果体を挙げた。もちろん、これは間違いであった。

それはともかく、こうして【 E 】を採用してしまうと、「心」は自然科学の探求の範疇（はんちゅう）からはずれてしまう。「心」は、物質的裏づけを持たず、からだとは切り離されて存在する「神秘」となってしまい、「心」については、「心」が勝手に言いたい放題できるようになってしまう。

現代科学による「心」の探求

17世紀、18世紀は、以上のようにして「心」の探求が、からだの物質科学的探求とは切り離されて行われた。しかし、生理学の発展とともに、徐々にからだと心の関連が理解されるようになり、19世紀には、ウィリアム・ジェームズによる心理学の創設となる。そして、心とは脳神経系の働きであるということになり、神経生理学、神経科学、認知科学などに発展していく。

「心」というものの物質的基盤は、確かに脳神経系の働きである。しかし、脳はそれ自体が独立に働いているのではなく、からだ全体からもろもろの刺激を受け取り、それらに反応して、新たな指令を出す。からだと心は、本当は一体なのだ。今や、このことは広く一般に理解されるようになっている。心の病が原因でからだに**ヘンチョウ**をきたす、心身症という病気があること

も、当然のこととして理解されるようになった。それでも、どこか、心身二元論の名残は、まだ根強くあるだろう。

(注1) オカルティズム 超自然的な力を信じ、それを研究すること。心霊術・占星術・錬金術など。神秘学。

(注2) 松果体 脳に存在する小さな内分泌器。松果腺、上生体とも呼ばれる。脳内の中央、2つの大脳半球の間に位置し間脳の一部である。2つの視床体が結合する溝にはさみ込まれている。

(長谷川眞理子編著『ヒトの心はどこから生まれるのか』ウェッジ選書)

〔設問〕 次の設問に答えなさい。

問7 波線部f～jで、「カタカナ」は漢字に、漢字は読みを「ひらがな」で答えなさい。

問8 傍線④**デカルト**の近代科学における功績は何か。その説明として適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 自然現象を神の意志の表れであると考えたこと。

イ 自然現象の説明から「心」や「意志」取り除いたこと。

ウ ヒト以外の動物の存在や行動も「心」の機能から解明しようとしたこと。

エ 物体が持つ欲求という概念を導き出したこと。

問9 【 C 】に入る適語を文章中から漢字3文字で抜き出しなさい。

問10 【 D 】に入る適語を次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア だから、 **イ** しかし、 **ウ** それでは、 **エ** つまり、

問11 【 E 】に入る適語を次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 心身二元論 **イ** 機械論的自然観 **ウ** 神経生理学 **エ** 有機的自然観

問12　傍線⑤**有機的自然観**とあるが、その説明として**適切でないもの**を次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア　生命が生まれ、育ち、欲し、考え、生きて、死ぬ一連のプロセスこそが自然現象の成り立ちの根源という考え。

イ　自然界を巨大な有機体ととらえる見方。

ウ　生命に付随すると思われる「心」や「意志」を非生物的現象にも当てはめて解釈しようとする考え。

エ　自然界の探求は、錬金術やオカルティズムによってなされるべきではないという考え。

問13　文章A と 文章B における共通した論旨を書きなさい。また、その論旨について、自分の考えを書きなさい。二段落構成とすること。一段落目に共通の論旨を書き、二段落目に自分の考えを書きなさい。（この設問に関してのみ、段落始めの一文字空けを必須とする）両方合わせて百二十字以内で書きなさい。

〔Ⅱ〕

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。（作問の都合上、一部表記を改めた所がある）

気に入らない人の個性が鍵

ある年の初めに私は次のような手紙を研究室のメンバー全員に送った。

〈私の研究室のメンバーは「お互いに人として尊敬し合うべき」だと思っています。各メンバーは、それぞれ、強い個性があり、それぞれ独特の長所と短所を持っています。能力と個性は人によって全く違います。

お互いに人としての尊厳を認め、尊重し、また、自分も尊重してもらうことで、世界でトップを走る研究をみんなで築き合うことが出来ます。

メンバーの長所を褒め、短所は無視し、①**決して自らの視点からのコメントをしないことが絶対に必要です。**【　A　】どうしても必要なら、短所はその人には直接伝えずに、自分でそっと、黙ってその人をサポートしてあげることです。短所はその人がいつの日か必ず自分で気付きます。人に言われることで、この自ら気づくという大切な可能性がなくなり、【　B　】、その人の短所は決して治りません。私たち全員が成長し、全員が成功することこそグループの発展に必要なのです。自分一人が成長できる、良い研究ができると考えている人は、大切なものを忘れているのです。他人を尊重し、その良い所を伸ばすことで、グループ全員が伸び、自分も伸びてゆくことができるのです。

人間関係の限界を超えて、世界一の「化学」を目指して、毎日頑張って行くのが良い研究グループのただ一つの成功への道です。私は、グループがそうした研究グループであってほしいと心から祈っています。〉

人間関係ほど難しいものはなく、また、多くの人の協力で、目標を目指して活動を進めてゆく上で、グループ内の好ましい人間関係は必須のものである。皆が同じ目標を見ているときは問題ないが、それに疑問が出始め、視線が変わってくると、お互いにメンバーの欠点が気になり始め、【　C　】、②**足の引っ張り合いが起こる。**大きな目標に到達するには、グループ全員の目標を一致させることである。特に優秀な人が集まった場合には、よほど気をつけないとお互いに傷つけ合うことになりがちである。一度傷つけ合うと、これはグループ全員の大きなロスとなる。

新しい組織を作る際、これは素晴らしい人だと思って採用した人について、場合によってはがっかりさせられ、こんなはずでなかったと思う日が来るかもしれない。実は、その人こそ皆さん方には大切な人である。どんな人でも長所があり、③**その気に入らない人の、あなたにとって気に入らない個性は皆さん方の才能を開花させる鍵だ**と思う。そして、一方では、あなたがその人を受け入れることで、その方は自信を持ち、生き生きと仕事をしてくれることになるはずだ。

昔、元大阪市立大学教授の井本稔先生（故人）が「仲間褒めをしてこそ、分野が広がる」と言われていた。自分の小さなグループメンバーをメンバーの外の人に話すときに、決して貶（けな）してはならない。大袈裟（おおげさ）なくらいに褒めて丁度いい。そうすることで、そのグループは繁栄し、ひいてはあなたにも返ってくる。これは大きなグループになってもそうである。そうすることで分野が栄える。

残念ながら、それによって自分がどんどん貧しくなるのもわからずに、これと真逆のことをする人がいる。

発展の扉を閉ざす言葉

自分で考えた、また人から助言された様々なアイデアは、聞いた瞬間にすぐには否定しないことがとても大切である。④**否定はやめて、全てをまずは肯定的に受け止める。**そして最後に、提案を成功させるには何をすればいいのか、何が足りないのかと、頭を絞ることだ。これは科学技術で成功するための、必須の第一歩である。

しかしほとんどの人が、最初に自分で考え、作り上げた枠組みから判断し、それに囚われて、他の隠れた可能性の存在に気付かず、その隠れた可能性を否定し、その結果、最高の成功の機会を失う。こうしたことによって、たくさんの研究者が［あ］の成功の機会を失っている。

【 D 】会議でも、人の提案や意見に対してすぐに否定する人がいるが、それでは会議そのものが成り立たなくなり、全員が迷惑する。まず賛成し、それからその提案を成功させるために考えた自分のアイデア、新しい答えを提案することこそが何より大切だ。それによって会議は本来の目標を取り戻し、その会議によって誰も考えつかなかった革新的な展開を見ることができる。

すぐに否定的な考えを話す人は、それだけで世界を狭くしている。また、大きな発展や大きな発明のせっかくの機会を失っている。これほどもったいないことはない。いわば、発展のための扉を自ら閉ざしている。

もちろん、［い］な考え方が全て悪いのではない。しかし、まずは自分を抑えて、否定的な考え方も排除しないで横に置き、出された提案を生かす方法を考えることが大切だ。提案した人を否定するためだけに、感情的に否定的意見を言い切る人を見かけるが、この人はグループの討論にとってネガティブな人であるとしか言えない。

自分の感情や面子より、全体の成果を大切に考え、そのためには自分の感情を押し殺すことのできる人が伸びる人であり、そのグループの成果を上げることができる人である。そして、場合によっては否定的な考えが、却って素晴らしい新しい可能性の

扉を開くこともある。否定的な考えはこっそり裏返してみよう。

テレビ番組などでも、すぐに否定する評論家は見ていてもあまり面白くない。否定することで自らの権威を示そうとしているが、むしろ反対である。否定の後ろにある肯定の部分まで言及する評論家は聞いていて清々しく、また大変に参考になる。

否定することは、実は発明や発見に至る道を完全に閉ざす上で、一番有効な方法である。そのために、いつも否定から始まる人は発明や発見からほとんど縁のない一生を送る可能性が高い。こうした人は思いがけない小さな思いつきですら、一番遠い一生になる。【　E　】、否定する人は、自分の考え以外の全ての考えが世の中に存在する可能性を消し去っているからだ。

人が発明や発見に至る一番効果的な道は、自分を否定することから始まると言っていい。いつも自分を肯定するだけでは、思いがけない発想には至らない。

（山本尚著『日本人は論理的でなくていい』産経新聞出版）

〔設問〕次の設問に答えなさい。

問1　空欄【　A　】～【　E　】に入る適切な語を次の**ア**～**オ**の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。なお、それぞれに異なる語が入る。

ア　なぜなら　　**イ**　ともすれば　　**ウ**　その結果　　**エ**　もし　　**オ**　例えば

問2　傍線①**決して自らの視点からのコメントをしないことが絶対に必要です。**とあるが、その理由として適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア　注意しても反発するだけだから。

イ　間違った注意をしてしまうことがあるから。

ウ　自ら気づくということが大切だから。

エ　注意しない方が人間関係がうまくいくから。

問3　傍線②**足の引っ張り合いが起こる。**とあるが、そのことが起こるときはどのようなときか。**適切でないもの**を次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア　グループ全員も自分も伸びていこうとしているとき。
イ　別々の目標でバラバラに研究を進めているとき。
ウ　お互いにメンバーの欠点が気になり始めたとき。
エ　自分一人が成長でき、良い研究ができればよいと考えているとき。

問4　傍線③**その気に入らない人の、あなたにとって気に入らない個性は皆さん方の才能を開花させる鍵だ。**とあるが、それはなぜか。その説明として適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　気に入らない個性が、自分が囚われている枠組みからの見方を開放し、隠れた可能性の存在を気づかせてくれるから。
イ　気に入らない個性は、自分の存在を振り返るための良い機会となり、自分をより一層、肯定させる機会となるから。
ウ　気に入らない存在がいることで自己反省の機会となり、忍耐する力が養われるから。
エ　気に入らない個性は、人生を考えるうえで深い知恵を与えてくれるから。

問5　空欄［あ］に入る適語を次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　万古不易　　**イ**　不撓不屈（ふとうふくつ）　　**ウ**　七転八起　　**エ**　千載一遇

問6　空欄［い］に入る適語を次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　限定的　　**イ**　否定的　　**ウ**　肯定的　　**エ**　推論的

問7　傍線④**否定はやめて、全てをまずは肯定的に受け止める。**とあるが、それはなぜか。その理由を本文中の言葉を用いて八十文字以内で答えなさい。

2025年度 入学試験

国語（2期）

解答用紙

〔Ⅰ〕

問1

a

d

問2

問3

b

e

問4

c

問5

問6

問7

f

g

h

i

j

問8

問9

問10

問11

問12

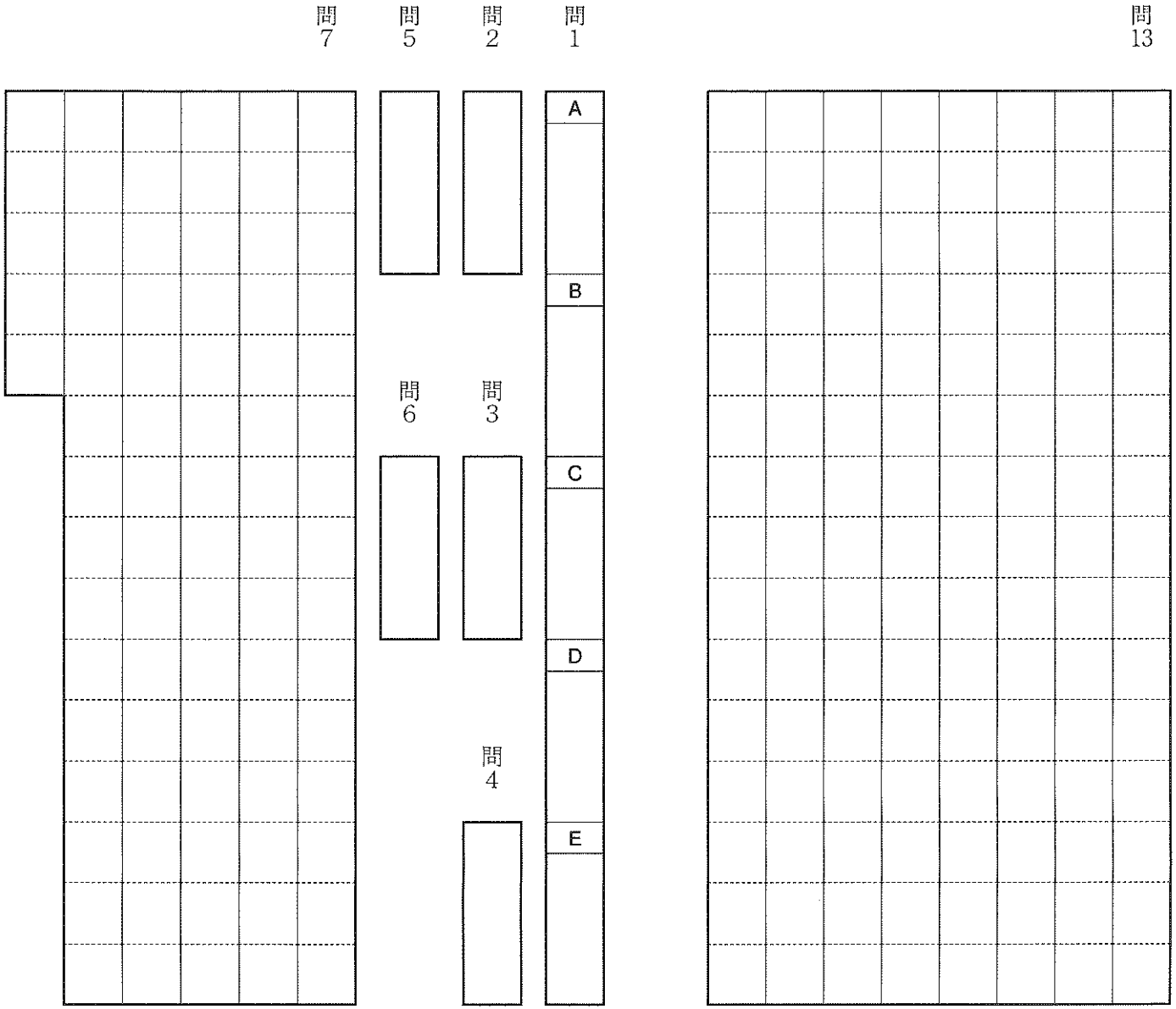
志望学部・学科	受験番号
第1	
第2	
第3	
第4	

※太枠内を記入

氏名

合計点

〔Ⅱ〕



2025年度
入学試験

国語（2期）解答用紙

志望学部・学科	受験番号
第1	
第2	
第3	
第4	

※太枠内を記入

氏名

合計点

〔Ⅰ〕

問1
a
b
c
d
e

問2

問3

問4

問5

問6

問7
f
g
h
i
j

問8

問9

問10

問11

問12

〔Ⅱ〕

問1
A
B
C
D
E

問2

問3

問4

問5

問6

問7

問13

2025年度　入学試験

国語（Ⅱ期）

解答

〔Ⅰ〕　合計62点

問一　a 滑　b 膨大　c 収縮　d よそお　e せきずい　5×2＝10点

問二　イ　3点

問三　エ　3点

問四　ア　3点

問五　その原因は皮膚と脳の発生の過程からわかる。外胚葉から皮膚と脳に分かれているのであるつまり、皮膚と脳はもともと同じものであった　3×3＝9点

問六　ウ　3点

問七　f 祖　g 提唱者　h ふずい　i 無縁　j 変調　5×2＝10点

問八　イ　3点

問九　機械論　3点

問十　ウ　3点

問十一　ア　3点

問十二　エ　3点

問十三　共通した論旨は「体と心は一体なのだ」である。一段落はこの論旨が書けていれば5点。二段落は、一段落目の共通した論旨に つ いてのマ　ただし、段落始めを一字下げていない　2点。　合計10点

〔Ⅱ〕　合計38点

問一　A エ　B ウ　C イ　D オ　E ア　5×3＝15点

問二　ウ　5×3＝15点

問三　ア

問四　ア

問五　エ

問六　イ

問七　もし、肯定的に受け止めないと、自分で作り上げた枠組みから判断し、それに囚われて、最高の隠れた可能性を否定し、その結果、成功の機会を失うから。　8点

上記内容が書けていれば8点。文末は「から」の「で」等で終わる。そうなっていない場合はマイナス2点。